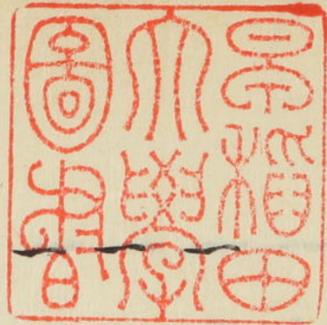




1 曾 5  
320



門 4曾5  
號 320  
卷



西郷書記

退私祿卷之上

明治三六年  
九月六日  
購

目錄

新井筑後守源君美著

如<sup>ニ</sup>本<sup>キ</sup>雜色<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>孟子<sup>ノ</sup>伐<sup>レ</sup>燕<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>解<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>登<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>解<sup>ニ</sup>

祇<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>昂<sup>ノ</sup>の昌<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>字<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>皇<sup>ノ</sup>の字<sup>ノ</sup>出<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>

仁<sup>ニ</sup>義<sup>ノ</sup>獲<sup>レ</sup>智<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>の事<sup>ニ</sup>

先生<sup>ノ</sup>座<sup>ノ</sup>右<sup>ノ</sup>の銘

学<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>章<sup>ノ</sup>の解<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>親<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>解<sup>ニ</sup>

象<sup>ノ</sup>眼<sup>ノ</sup>令<sup>レ</sup>并<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>壽<sup>ノ</sup>の掛<sup>レ</sup>物<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>然<sup>レ</sup>儀<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>解<sup>ニ</sup>

降<sup>レ</sup>光<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>字<sup>ノ</sup>義<sup>ノ</sup>の解<sup>ニ</sup>

上<sup>ノ</sup>板<sup>ノ</sup>滅<sup>レ</sup>亡<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>一<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>先生<sup>ノ</sup>の氏<sup>ノ</sup>

上<sup>ノ</sup>板<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>の事<sup>ニ</sup>

笏<sup>ノ</sup>の事<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>褪<sup>レ</sup>紅<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>事<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>撰<sup>レ</sup>寫<sup>レ</sup>先生<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>活<sup>ノ</sup>并<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>桓<sup>ノ</sup>の事<sup>ニ</sup>

学授の伝

狸の事并妖乃事并白蓮の城乃事并眼話の事

虎林長をの侍化

丹羽家乃事

九条家律法

武列金沢西湖梅

謙倉乃地名

春日此辨

金沢文庫并足利学校

雨表及み命朝鮮助話の伝并み音

中根守右衛門松前渡海の話

阿部甚良の事

常棣花の話

萬葉遊とつみ字季吟話

束帯衣冠の具

同部

関新助和漢弓殺の話

大村因良和領り去珠出り話

播川多田社頼光旗の事

墨守忠臣三堂山軍の話

同人久正持軍の話

同部

同部

台徳院様所法名の話

中之目錄

張斐の侍

義平の十六騎

頼朝乃七騎

板倉内膳正の侍

藤芝熟授兵を乞ふ時加長家の書状の侍

大坂記抄

鐵田貞道のこと

井戸の焼乃事

甲賀侍のこと

遠列今切乃事

中華人口の多少

秀吉の令少く奥の田代を授定せし事并改宗

會津を収めし事

輝宗を殺せし事并會津に天王寺を建せし事并改宗

保及乃事

秀吉の十八万石の如き事并書經の文字を用ひし事

藤生家の守室并會津の事

藥師の事

若松の事

西表の事

卷田八幡宮の事

先づこれ

臨津寺庫入通活左近の軍儀

— 山崎左近の事

— 相模下総守并古波屋の事

— 小國堀左衛門の事

— 大神君に因幡とくさくさの事 并 庄屋と

— 下之目錄

— 大神君に金澤文庫の藏書と云々上の事

— 對列の事

— 小瀧の事

— 井伊掃部頭及供りりの事

— 秋迦の法乃事

— 僧倉量清の龜居の法

— 盛久子自觀音造立

— 氏満佛牙舍利双載

— 鎌倉源家相傳乃地の事

— 頼朝の社并實朝乃社

— 高氏自画自實の地蔵

— 本曾の塚

— 東寺乃大佛

— 江の鴻悪龍

— 榮溪和尚の詩

— 江乃橋の碑

— 龍教乃墓

— 江の橋乃龍穴

— 徳宗権現の社

一 佐竹の社

一 江戸の根え

一 舞水本邦よ中華よはるり事二つり話

一 先生小学乃話

一 趙注孟子の書本并夷賢志

一 書月并東宮学士の伝

一 古今醫統写鏡の法抄并東克序大塔宮持詩

一 十二単并并伊神代抄の事

一 小中三の緒乃事并帝王の謚并字法くと云ふ

一 庵んぬりの事

一 大塔の文乃後由由の事

一 土仰門院乃瓶子并茶碗

一 法不三事の事叙乃事 附柳宮持蓋并月費

一 江戸の妙茶

一 幽庵の庖丁并る乃かきり

一 著の事并同公供并大宴

一 牛車乃宣旨并准后の宣旨

一 日本武の事乃事叙并裾

一 洞度掛并由由并大床の御膳

一 禁秘抄并竹内家の事

一 鳥居家の事并同家盛衰







一 家系は先祖は保平公の後か。後をえい作笑れ桂柘より  
後ふ山村と名を存本下氏の人乃其子と申す今乃  
苗字申す申性よあつさうかといは

上杉家の事

一 謙信能登世免の事畠山八兵衛のうら長討守らの子  
九郎左衛門本を國とらけうまう畠山は後妻御一々  
上杉上野介といひて世上上野と号せし加賀の以上  
といふ今世合兵のゆめくは系連米玄のト人下妻氏  
后信也一之下妻は今も申新古乃家系申す此後志  
川口は小口といふは謙信は城といふより上野に別荘  
の地を安後世直りれ一とて其本右衛門と云一系筆り  
しと申すまの能をへ攻入一申すは時よ能を流し信長は

後兵とては使ハ長う子の傍なり如水とてはあれ使を  
流しきりせし一信長は柴田相討来を後より其いせ  
お如るに守たりを種は柴田相討来をいひに種は也  
と前うけ守りし影か見ちられよ如るをきりてんせに  
皆く味方の前なりし如るを少佐味方の城居て其の  
しとていひるは後兵とていひていひていひていひて  
方代前よそのいひるは前の中を述るはれは松任前  
あつと申すゆらといは後兵よるを屋うは松任よるを  
とていひたきとてお將い返一あつ中を述は上野後次男  
いふは畠山いふ一今の上野をいふと録しうは上野元  
より申す申名とて申すといふ

笏并祖紅并櫻宮の信并二祖

一 笏の事、詳し周礼をくたり秘とす——と後を

一 祖記としてあり追記は他の語

一 聖高ハ文章の妙をい古今人物論の座——といひ

一 二祖ハ孔子久を魯の政事とあき先流つ二祖は沈

化して賢人なるをこれ魯ののろく治之——孔子自

ら政事をさうく二祖を考ふをさうていさうす

學校の作

一 河村隆也も後せ——

大猷公の仰代はの校を興——の事後之——又通書

卷中ハいふに生十人斗す生のうよまき指南仕

らと——の字書あらう中さぬすのみて私乃門才も

九種の者十人ハあく此い——の事申中——種の中は

と又柳生丹波の物録——

大猷公の仰代は既ハ儒学あらうを概ら——に及春の不

均すハあはは席ハ馬公——して申さありと又性善乃

物録と——市神聖樂少——を校建立長——とて後

うと有——種又をさうくハ所あるも立て学あ——

を——中さうくハあ——とハいも申さありといひ——

説と合せ——の事述書——の語

聖并妖并白蓮の戒 并 聖茹

一 聖といふものハ善也とあらう——を同は——ぬぬぬ

——の事——の語——を以てして

——の事——の語——



有り古園公飛科あり新りを感して松任十二万石を  
う川は長成長の後中園をいふのき中ありと云々  
成田八法をいふと云々

九条家津法

一 九条家又津法り室町家此記録もあり但中朝乃  
津令ハ唐の津令ハ是を法らるるてハ津法津とい  
ハ云々と云々

武列金沢西湖梅

一 武列金沢ハ西湖梅あり梅名と云々  
理云々

前朝金澤古招提

梅有西湖指枝拜

遊十年遠往噬曝

未用造恨翠香啼

自注之西湖梅先代之主属商船移栽杭列西  
湖之梅名之以来開為遺恨矣

澤倉入事

- 一 澤倉の神院あり本年家の志願といふ幅
- 二 布長さ三人より九万八千餘神といふ幅
- 一 同不写事と云々編畧一覽亭詩口集

題瑞泉一覽亭

元人旭之羽

桐干縹緲錦峯頭回視三山与十洲翠玉

一 峯知華岳青烟九点見存列無窮雲接蒼  
悟晚不尽波逐碧海秋使客題詩招李白御  
風騎氣芸仙遊

後金地名の事

一 後金各七郷

小林郷

長尾郷

一同創七口

巨福坊坂

傾松坂

大佛切通

杉島坂

津村郷

一 東京瀧々町京廣寺禪原古先平元碑銘あり

一 揚漢斯ヨウケンシの佛克塔の銘あり

小坂郷

岸山郷

村尾郷

久敷郷

羽比奈切通

急谷坂

極楽寺切通

外ソト小坪切通

春日の傳

一 春日の佛師の名は公像の事あり。此コレは假西カセも春日の傳の中にも日記より其傳文之勅令書體は内國も春日那の人と見ゆたは公像なりとありとを春日の傳と云はる。氏乃親は春日大明神の傳と云はるなり。

全辰文庫并足利學校

一 全辰文庫は少系抄のり時建立。一 和漢の詳云を以て免儒書といふなり。此より全辰を以て和漢の詳云を以て全辰文庫の字を假之。其後より上杉書房が憲實執事の時に再興を遂げ、全辰大系を以て或は全辰の學校は少系九代 經島の内より全辰を以て一四改なり。又より全辰の學校は嘉和二年より全辰書より改められたり。

ふじの時の建之にお房も実足利にらるるの名字も  
地事として字を解し法言とあるんを法を憐愍と  
これいけし法言人の私を学居てもあつたはしといふ  
の文庫と再興一日本二列の字を校とらるる西武蔵より  
字を多く集るとあり法言成氏の討なり

雨田公房の帝朝解助信の作

一 雨田公房の帝朝解助信の作  
雨田公房の書と云ふは助信の事なるべし

車載斗量不可勝数

昔のふれ下よらと助信と入夜の家乃とらと助信  
と入るとして帝をよてあまらるにわ朝の宣命信ノ玉ヲ  
杯ノ助信けし如しとある

一 先人アアイウヘラカキクケコの新い世は討めらるる  
は度討るよらうらゆるよは則朝解乃言をいふ  
は朝よりかの玉の信たるは亦能國より中朝信たる  
是れ也

中根守左衛門松系後海の話

一 中根守左衛門松系後海の話  
同じにラキクルと云ふはよらとラキクルこといふ形と云ふ  
言く判友友と云ふはよらと中系と云ふはよら判友  
友佐多のいふとを礎今に後出り又より中系と云ふ  
しと年三又と云ふはよらと中系と云ふはよら中系と云ふ  
はよらカラフトと云ふはよらと中系と云ふはよら中系と云ふ  
是のよらと云ふはよらと中系と云ふはよら中系と云ふ



一 百多ふ連とらふ字とてテと讀むれいころまてとつめ詞  
 帝履方りぬく動くと讀む也と讀むをく一とてとて  
 ころまてめく古くころまてとていひ傳たれい古くま  
 ちころまてまもろまてころまてころまてとていひ傳たれい古くま  
 ころまてころまてころまてころまてとていひ傳たれい古くま  
 例しく粒くころまてころまてころまてとていひ傳たれい古くま

朱帶衣冠の具

- 一 朱帶衣冠の具を仕泊とつめ人々台此人る舎及乃  
 つ人なりとも昔よ  
 一 冠 一 纓エリ 一 袍  
 一 大帷子 一 下裳 一 裾  
 一 記コウヒトハ 一 袖と付 一 表袴

- 一 赤大口 一 石の帯 一 坐  
 一 平緒 一 笏 一 衛府の太刀  
 一 鞆子 一 袷ヒ

右朱帶の具なり

- 一 刺貫 一 檜扇子 一 朱履  
 一 鞘巻の太刀儀法の考とつ

右衣冠又いかに袷衣冠より也但か袷衣冠の付  
 口糸以上の紅平太位ハ太くころまてとていひ傳たれい古くま

- 一 糸は身の付合紋關袷の袍  
 一 小通身の付濃花田縫袷の袍  
 一 親王 侍儀  
 一 柄杓 清花の大臣 小赤衣又い赤衣





下知して是を防く又山守長門横山大橋はるありしを  
返す事山守井ノ敵の返りたるをいふに接合す事井ノ  
池をけり後地大將上坂又主將大橋九を束一河斗るを  
下知して後地をさるるを上坂も自ら後地所存して自營  
大橋の宿留の宿とけり日比神事年敵の大將宗也しく  
下知してさるる大橋の宿とけり日比の宿とけり  
老く日もさるる一白さるるをさるる敵にさるるを  
とけりけりれハ木橋の宿とけり日比の宿とけり  
少くたさるるは家差揚二方斗の櫓乃指大にさるる  
さるる事ハあはれし事とけり日比の宿とけり  
日比の宿とけり日比の宿とけり日比の宿とけり  
さるる大橋の若意是回高た生しとけり日比の宿とけり

ゆきし大橋宿の海にさるる事とけり日比の宿とけり  
さるる事ハあはれし事とけり日比の宿とけり  
とけり日比の宿とけり日比の宿とけり日比の宿とけり  
録うれも士八九人附来り後地をさるる事とけり  
ハ後地を附来り上坂は白のくさるる事とけり日比の宿とけり  
さるる事ハあはれし事とけり日比の宿とけり  
上坂の宿とけり日比の宿とけり日比の宿とけり  
さるる事ハあはれし事とけり日比の宿とけり  
日比の宿とけり日比の宿とけり日比の宿とけり  
將杉平久を樹池田海をさるる事とけり日比の宿とけり  
麻毛七平久を付ぬ又後地軍も附来りて敵とけり



しるし藤原出ぬか後石見とていへりしは城とまじしめて  
越前小の庄のみまは伊守も方々越前中を和使して  
おとす軍にみち長崎の辺近却れし後今反大坂居  
らぬらうをまぬりて中の記伊守病ひきりて十死一生の  
形見且秀頼に對し書り送ふに好ふ事上におくも人数  
しうりしを振るしといふ皇の青山信のまじり下よめを  
ももはけ時利長とて田成をまじり振れして中の  
家康云しよといふりなるに御多の中公出一人のしうりし  
言中しよ給ひ給味きて 家康云し御合されしむよ  
ゆやし且大らお少て強さしむるも振しぬか一日は強味  
きて後上居しとて合はる月七日は強味にてたり

同部

一 大正持の没乃財令身強而利政多しに後軍より人ね  
をかりぬらまふりとして後度の没乃事守り利長の合はる  
ゆりゆ 家康云し御村之帝協と使してまじりの没乃  
めくゆらしたるゆらさてゆり強味はらぬか大坂  
言中し強味はらぬらよりしなり 神君の悦きて御村  
を免し貴令に取らされきて 神君の悦きて御村  
めて御強味のゆらけり利長強くも強味はらぬかし  
御強もて利長の御室を石田は質とせしゆしゆにて  
書を捨てし末代述の恥みてもらふ強味も方々中強せし  
ゆされたまふ利長返書しゆらゆらゆ一階も強めぬ  
江戸はぬらりしゆらゆに一方ははれ折るゆら母とゆら  
書を捨てしゆらゆと秀頼と對しゆらゆに





退私録卷之中

浪斐の侍

一 浪斐の侍の物語は浪斐の侍の長治の侍の侍の中

赤豆編芒史

髭頭東指壺

とく

義平の十六郎

藤田の藤政清

後後島野實基

二浦次郎義隆

波多野次郎義通

佐々木源二秀久

金季十郎家忠

山田次郎時通

島田小次郎忠隆

上総次郎廣常

成島別当実盛

猪股少年六則綱

熊谷次郎忠實

平山武者不季重

足立右馬允重元

岡次郎時貞

片山小八郎

頼朝の七郎

四代冠者佐義

新谷次郎

去屋之郎

去佐野昌隆

去肥次郎

去肥古郎

去清義史

板倉内膳二俊の事

一 板倉内膳二俊の事は板倉内膳二俊の事

板倉内膳二俊の事は板倉内膳二俊の事

の因縁も家系への遺書よ

去年乃り此に汝に就く鳥帽子の位と志先今年乃  
り此の事より終る覚乃終る事申するを了す

此の事終るに汝をさするに汝の名の御もえんけと終

都て親族兵ととらし加ぬ乃事也

一十月十日の事と今日終る致ぬ事と向う後大用立記  
年戸一信方加ぬ事と向う年補給元紙の宛所管在書  
表の事書多候書し長湯の事と上使一信使志と板子候  
事等と上使と向うの事と向うの事と向うの事と向うの事  
是若福列の事と向うの事と向うの事と向うの事と向うの事  
少くも向うの事と向うの事と向うの事と向うの事と向うの事  
向うの事と向うの事と向うの事と向うの事と向うの事

月日

向部氏

松平氏

松平肥前守

大坂記抄

一 大野源理 三万石

藤田隼人 六千石

平塚九助 四千石

鐵田雲吉 千石七十五

竹田永翁 大岡の村祿守之旨と書形へ付し色大石

青木民部 二万石

鐵田之丞 官守の子守屋守也

本村長門守 二万石

那 圭馬 七千石

速水甲斐守 一万石

大谷大守 七千石

鐵田之丞 官守の子守屋守也

井上少左衛門

平賀の父と和え田月少左衛門と後物而語り又喜來  
加勢の少左衛門討死志願を許り一人なり

長男我孫宮内

六十余

明石掃部 卒

真田左衛門

六十斗

後藏又喜勘 卒

清水越前

六十斗  
七田平の親

堀田五水 徳吉翁  
官の親

毛利豊前

平賀を和え十全の誠と山内少左衛門  
と侍母と女子二人あり

伴 固若松

六十斗 吉原の里の人女子家の多し又  
又少左衛門と又又又

鐵田貞通の事

一 鐵田貞通は信長の孫に任長其後とて附し貞通は祿祿とて

堀原雅五舟といふ人かゝりて

在徳公の末代より出されは其より來れり是も堀原と

名はあまもつとて鐵田と改めしは後、徳治と

名をとりしとて之他えの名宗は貞長と云ふとて通春

實永其忠に貞通と稱しとてしりて是は稱せし

井戸の焼の事

一 右側の附井戸若狭の如解より某焼と云く焚せしを

井戸の焼といふ

甲斐侍の事

一 甲斐侍口書は實永の弟に加賀氏其人を以て侍と

名をとりしとて右側の中より某焼と云く焚せしを

年 神祖より附山景行原次とて四月に乃後と

名を侍百人石連甲斐侍十人丸と云く焚せしを

侍福永信吉と云く焚せしとて十人石同の侍を以て侍と

名を侍福永進敷も永永の志は松丸と云く焚けて侍と

名を侍福永切破り焚せしとて附山景行原次とて甲斐侍松丸

くりたりとをききしをききしをいひたりと又多分なり  
 少強なりは竹本丸一級り竹林左門九節毎山五節十節  
 新志生の梅田源志一の并子平の山山中福永子の山  
 竹林左門九節中の藤戸を月助を才の長を藤戸一  
 河尻を藤戸志一の右切腹の藤城を打破り出たり  
 系流くくく上居の河尻志一二百石の地持下人又或百石  
 級合の地持りし地持十人又一組又或百石の旨本多  
 佐藤志一といひ佐藤志一其口みく其礼大坂五段五段  
 台地後様四代衆の平六節又山五節又山五節又山五節  
 をさかしく切さく一事  
 一を列め今切さく一事後古川門院明應八年六月十日  
 の事なりしを大和系藤戸一人河尻志一其口みく其礼大坂五段五段の探り

中華人口の多少

- 一 高平水去為別人口 千二百六十九万三千九百二十一
- 一 成王の時 千三百七十九万四千九百二十一
- 一 平王東遷 千一百九十九万四千九百二十一
- 一 漢 二千
- 一 光武中元二年人口 二千二百七十八百
- 一 明帝永平十八年人口 三千四百七十二万一千
- 一 京帝章和二年人口 三千三百六十九万六千三百六十七
- 一 和帝不具元年人口 三千三百六十九万六千三百六十七
- 一 安帝延光元年人口 三千三百六十九万六千三百六十七
- 一 順帝建康元年人口 三千三百六十九万六千三百六十七
- 一 冲帝永嘉元年人口 三千三百六十九万六千三百六十七

一 質帝中和元年 人口 四千七百五十二万六千七百七十一

一 桓帝永寿二年 人口 五千六万六千八百六十一

一 通典の東抄口 五千三百四十八万六千八百五十一  
六万九千六百四十二万

一 三國通計 五万二千七百一十八万九千九百一十一

一 晋武太康元年 人口 千六百六十六万二千六百六十一

一 宋武大明八年 人口 四百六十八万五千五百一十一

一 随文帝末 人口 四千六百一十九万九千九百一十一

一 玄宗天宝十二年 人口 四千四百七十九万九千八百八十一  
八万二千八百八十二万二千

合九千二百九十九万九千九百九十一

秀吉の命少く奥羽地校定并

改宗命降を領せし事

一 小田原陣の討京勝羽丸を以ての田地を校定し奥羽長改

よ有村長隆を以てその改事とせしむる也秀吉の命下あり

一 二浦佐宗七郎弟連の後芦名平田節盛氏命降し代り

右を白川に結陣須賀川に二階堂二下松又津川末の

幕下盛氏よりありて岩瀬須賀川の戦に二階堂の

子と名を盛隆とて岩瀬を名に三左衛門と云ふの事

執事ら伊達輝宗の二男を名にせんといふ盛隆の死

後守り岩瀬乃佐竹弟を升二男弟廣と名を名に弟廣の

弟改宗と名を名にして會津を領し改宗の印は年長なり

輝宗と名を名し事年會津に天皇を奉り改宗祥友

一 輝宗と名を名し事年會津に天皇を奉り改宗祥友

一 會津の事年會津に天皇を奉り改宗祥友

一 通して名を名を領する事

一 政宗のむろんせし山戸田八左衛門の紙宗之協とて名をたす也  
ゆえせり

秀行十八万石より如事并中経の文字を用ふ事

一 秀行十八万石より如事并中経の文字を用ふ事  
同大徳院使は一七〇〇左衛門の直宗とてなり

一 國書の内より必しも中経の文字と一均なり在り古案  
ありと五山傳よりしとて生直なり

蒲生家の子室并合付法也

一 蒲生家村主室依り本の姓を細川忠興本室の村直理  
八左衛門の姓をとりしと中経一対氏御少をたのむ事  
忠興返を乃村氏御しけを氏々の死後秀行初少乃村氏  
されしと但け流い後より秀行少りしと城田徳宗より下され

一 とぶる見ゆり

一 合付法は色に直理八左衛門とて其と蒲生に直理名和し  
酒かきと其の大塚七左衛門と合く直理をすはし蒲生  
源右衛門曰左中経と直理と別し一六加後法より流し  
又秀行の女をまよとして母を同くす利根友成なり

白石先生輯

一 其の正月書字の旨也直理の後日光准政の書とて  
教帳の中より

江別文稿

石津寺

此書は先年中堂に在り其師如來堂より白く命合子  
百五枚紙は御村也

一 元来白地の如雲佛の下の向加と書稿も無く追々裏紙は

日本書紀科より重出するもの多し然るに其書紀科地  
少くは御代後寺教上

愚拙より不逞に世に傳へて居候寺をいひ人の少く不  
信の草所故に入佛少くは戸中を燒失せし免く後之人  
の妻嫁をいひくさせしむるに天下加護乃ち免く後之人  
中堂ハともく何乃加護也

若松海人帝義之新井の作

一 甲午三月若松海人帝義之新井の作中されしを  
去るに牛初夏の日新井伊原の依を賜ふとて新井より  
新井とてしるす也近く之を新井とて左田新井平坂とていふ  
忘れし其左田新井乃新井村より庵の依れりていふや  
あつし中の中いひきき依り今も左田の依乃依りて其依

左田の依いひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
二を極むるの依りていひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
りたりとて其依りていひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
勅信也いひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
菩提寺よりいひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
此邊より新井と稱する人其依りていひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
りたりとて其依りていひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
中志の家より文章よりいひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
出家せしより家の事いひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
承りらひぬき文章院よりいひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
しを依りていひきき依り今も左田の依乃依りて其依  
はたより其依りていひきき依り今も左田の依乃依りて其依

成るべし聖徳院の御よりとてさうらうに伏せしむる  
中り巻くつらぬわうく安京傳をんを多りしにそ巻物に  
をる物とてさうらう本井の秘しを持来りさうらうやう  
はうらも彼のほきをえくよまよ平をわらうらむの  
まのりさうらうまえさうらうれいほくえんをさす  
進なりさうらうまへんは編者山下文多の字し  
とらりさうらう地とらうらうらむさうらうらむ  
加賀のまをえさうらうらうらうらうらうらう  
と名宗後より新井と改えたり家代致さうらうらう  
内乃井造のりさうらう文徳院のりさうらう  
記さうらうらうらう新井の下乃新のりさうらう  
進さうらう一人の送さうらうらうらうらうらう

弟助より感状を揚りいさうらう進めよらう  
なりまら乃井井掃部致さうらうらうらう  
乃中を中記さうらうらうらう感状さうらう  
今も井伊友より新井うらうらう今いさうらう  
音信もあけいさうらうらうらう文徳院  
よりさうらうて感状のりさうらうらう  
らうのまらうらう後之事らうらう  
中らうらうらう昔の二男の二男の二男の文字  
四男のりさうらうまらうらうらうらう  
中らうの事らうらう文字別今れさうらう  
別巻を四のりさうらうらうらう  
の旗乃致め入の事らうらうらう文徳院より巻物

写し給ふ事由かゝり物よりいへば後義元大將より  
その年の冬連りひらいたる好い儀役も致しはらぬに  
汝もいづいづもいへば是れをいへばいづもいへば  
申されり

兩天皇の帝朝解の信

甲午十月十九日右天皇の帝朝解の信  
國のよき事と聞きし事ありて先皇の御心  
をてそえし柳のうらたしと申す事あり  
あむ又父の信語のあはれも信よか  
是の取ひは右の心もあつと申す事あり  
字世達二進元字世昌の事も胡解人名つと  
申す事あり

右天皇の八幡宮縁記并神功皇后の縁記

一正徳 甲午六月廿六日右天皇の八幡宮  
縁記の事あり

是年高社某詣の付相之縁記の事あり  
飯仍拾四本と遺致新字し功益既既  
事あり

右天皇の八幡宮縁記并神功皇后の縁記

右近衛大將軍源朝臣

右天皇の八幡宮縁記上中下老事  
成汚穢塵垢し洗或老篩列衣損し  
書画以欲為副本し志社儒年来し  
周長今般而徹光課一業し族書  
画新字し事自由也

麻八の日記改平上云々し且終る功矣即詞ハ其長集  
尉守改深毫充画去次男九兵衛尉重信及不從源田  
仁多尉孫井傳二帝之弟長九帝白石久保土丹其業  
能末字之佐重家之弄令換之改而己後其業莫胡  
蓋不倫之皇法相披之事令容易者且彰 神威也  
信公蓋之身伴高社之灵験者乎因以之其納之室庶皆言  
和南

寛政十八年孟春十五日

法平寛度

大橋入道武部卿

新出神功皇后之経記其由天田宗廟之坐家繪之  
其是象十二條昂憑之則之慈通帝施法之化也

亦享又年夏廿一日征夷大將軍九代長義若造源大將源朝臣

寛度の跋りり

先世の話

一 先世の事ハ多ク其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
ニ其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
又曰源志之語リハ行中其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
十六歳ノ以連ハ不其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
同其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
行中ハ其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
たり行中其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事ニ記ハ加後其ノ事ハ其ノ事



少の昔の補令乃竹中と云く人々にいひて人の智恵  
ももあはれまの事といふなり竹中の事半ハ老き一敵かよと  
写一星の跡の外跡れ多るまの事一星の跡といふと云ふ  
一又いふ事田うくは跡無気具ハ父子の別は乃外りくは付  
子忠父へのはの付まよ有一あめし杖をぬく投付く  
あの色くくといふ事一よゆき少細よ懸し杖の跡てか色  
ハ血の色一くくかといひて云ふ

治村を庫入通治九を一軍隊

一治九進ハ杉本流ぬしと後よ石田之敵は二一カ石代河二カ  
云の縁よてまあ一振き出ぬ会ケ糸の付よ大垣乃城を  
治村軍隊乃付島は各庫入通之敵よ向ひくたをさるれ  
と云一くいふ女左をさるたをあの通一隊をさる所よ事

たまし紙をさく御く切く白んちくが刀眼左の鞘を落くた  
老よまはし一し振く列きたを逢よちたがことさる入は是く  
と後を断くまをさく出くをを圍と滿く左を入通の云今夜  
内府と治村の軍いく方まといひりたをさる人今  
と治村もいひりまよて陣中いひりたをさる人今  
治く徳軍志くさるれぬんと治はれいひくは身夜軍不  
まくいひりまよて治と入はすくりやくは夜軍のさる  
幾内本公の軍乃治は治村をさるあれりうくは夜軍  
まよて治村の軍乃治は治村をさるあれりうくは夜軍  
といひ治村の客戦乃敵に味方ハ大徳に治は同出有り軍  
暗ても大徳少く夜軍をさるあれりうくは夜軍  
乃一戦にまよて治村をさるあれりうくは夜軍







切く上り御安よ火を子腹を切人と一宮よ定むるは是  
とも御中も内室の生も善よりその御法ありし事一とく  
るより公の事をいふと公の御心次第ありては敵を  
印して御法とりされは

羽柴下徳忠并ち波屋意事

一 羽柴下徳忠は伊勢神戸十二万石の領主なり其子京乃  
後浪人として後よ少の長主と一和よ名出され一万余石を  
賜ふは是を改ち代は病身より起すを以て二千金  
下されしとて改ちよあかくして娘を人けり改の事を  
若く家を銭し

一 土波屋意は其徳の土波より改ち亡ひ付り幼少多て母方の  
叔父言治屋意といふ神長は是て味方京の村大久保

新八命を母にすくの事一人は後よ土徳乃相する万石を  
賜ふ今の土波は御事

小園塚左馬智事

一 先生しり小園の塚左馬智は世は名人左馬といわれ一  
人有り二千八百とて死去し柳生細見は三千七といひし其  
ちくまは千八百ありたよ中されは天下の政をどうしては御  
あり方安人ありし人の中し多し人ありとては千金を  
多し物書ありし人今にその子孫加はる事といひは金十  
坪並信の村は其智よ悉く其れ以朝政下とて是れ  
秀政めく不便の事あり肌腹し人し其金十坪  
印ありし人といひて送られし村を包保をせぬとて  
の事して其れは村を包保しては一人は其れは



一 庄屋の湯成後よりをせりて一不し或可不入の地は庄々  
山庄別の多しひくかのみ庄を乃敷ひたり固は清のなり  
を江乃多しむらみの思ふとく不り人より口湯院をせ  
らむとて又花山法をてし後もりりあむの由有庄を  
ふらばるありて後よりも後庄を小地取をし定東が庄を  
神君令は文庫の気書とひ上入事

一 神君印代より山乃信字授ふは御まゝ令はの文庫を  
ゆゑ記して御書を授閱して後を命さ令はといひ後ひ上  
給りし書たは民やうよむゆは御政事要書後をあらし  
只十九巻しきとて先生のあまお乗りてまらひ令はす  
とらし書書の事志名を人しかりしは先生はあまお乗字  
令は廿五巻は價をせしとてし後よりあまお乗者入

わしをせしとて山井校書してさらふ名へりりゆりしは  
一 求のりし先生の手書見ゆ欄乃しひて小記せしとて  
以て昔の天下の政事とてさかかへて多しとて吳國中  
を考へしめ是非を論せしとてさかかへりむうか  
しつとて

對列の事

一 先生より對列日本の要地こそありむら日本の地と  
いひ事りし小治部といひと相解しむら唐もさうして  
よふ所の背とてやりのしゆれは外むらり多しゆれは政乃  
ゆ得る事とての國は四か所解の外はと多しゆれは  
近し對列の偏長小治部を幸よ先生よりさしてゆれ  
は今相解乃唐治とて古の任部乃地よて兩國の藩

物名にらまのしりよりうる藤ふさねてうの玉よもあまも  
を事とを治つぬはまのむりなりとひひとあり

入信の事

一 和よつてう信も又討たる目一と地也一と信よは治つて  
よ善陀山もほくき又い獲ん中との地へ信をきゆし法胡乃  
うめ茶明のわく海合歳を如し信よ南京の高船長湯へ  
来りし大船を善陀山よかく船少船よそををこひく  
善陀山より船を出して来りし信よ南京の権船よを  
ほくき来りし福列津の舟大船乃をを返り入信せしに  
大船より人出く船の外よをひてそ方のら板乃也まよは  
るとの信也いま(き)といひには南京人言て船のちひ(き)を  
も信也の報にうんちこれ船ををりゆりても此船よい及ゆ

ほくき(き)といひと長湯よ力言見事(き)をたつゆ信なりを以不  
めくつ信少船よて大洋とあの子来り事ぬまなりと信  
らし(き)海上波あ(き)ゆり信は(き)よ信也(き)来りし(き)  
信也(き)考(き)子(き)信(き)茶(き)よ(き)ゆ(き)信(き)少(き)信(き)た(き)地  
よて(き)期(き)も(き)五(き)船(き)山(き)と(き)信(き)を(き)押(き)入(き)事(き)を(き)明(き)期(き)も(き)之(き)信(き)  
少(き)と(き)信(き)と(き)事(き)言(き)し(き)ゆ(き)信(き)の(き)い(き)め(き)信(き)を(き)い(き)ゆ

井伊掃部及信の事

一 方孝縉ハ燕王の世子なりをある返せし(き)信(き)に(き)父(き)  
ゆ(き)信(き)を(き)加(き)人(き)子(き)に(き)不(き)為(き)を(き)と(き)ん(き)た(き)る(き)此(き)一(き)来(き)め(き)て(き)方(き)孝(き)縉(き)  
の(き)信(き)を(き)ら(き)ゆ(き)す(き)る(き)井(き)伊(き)掃(き)部(き)及(き)信(き)の(き)志(き)信(き)を(き)し(き)志(き)を  
信(き)の(き)け(き)め(き)を(き)掃(き)部(き)及(き)信(き)を(き)ら(き)ゆ(き)信(き)を(き)し(き)志(き)を(き)信(き)れ

釈迦の法乃事



清水の本より右の腰は吉並一より十日と係備を右衛佐  
及少系江前時改より作付られ豊久系於よかくも存り中少系  
系中をも存り求むと改より又尋の境をわたり下女来りて  
清水や豊久の夜しと清水と信くもや中しとせり少系  
悦ん清水も也一人を重命いんせ豊久を右補右衛佐  
より豊久改より種余入る希を根系京時作とせりて外平の和親  
と改のつよふ細と述も豊久の平より改より改の改より改より改  
の改より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
文治二年六月廿八日改より改より改より改より改より改より改  
て又い改より改より改より改より改より改より改より改より改  
そより改より改より改より改より改より改より改より改より改  
改より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
改より改より改より改より改より改より改より改より改より改

あより改より改より改より改より改より改より改より改より改  
又右衛佐佐及少の方乃改より改より改より改より改より改より改  
少り改より改より改より改より改より改より改より改より改  
人より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
中より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
改より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
一より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
改より改より改より改より改より改より改より改より改より改  
七月二十日改より改より改より改より改より改より改より改より改  
氏族なりと有け盛國の改より改より改より改より改より改より改  
盛國の改より改より改より改より改より改より改より改より改

氏改佛牙舍利改并類

一 正徳院仏牙舍利皇集より貞治二年四月十日府君源  
の氏は因覺寺正徳より向く佛牙舍利を頂戴せしむ  
府君一代一度の冠射は大家至京師徳仁寺の舍利有り  
神明院より建永中兼山僧正の意上人遣唐使より及眞  
律師の在せ乃時感述より仏牙の舍利四和のなるは  
りり帝帝の中よりして後朝より皇朝大旨の再使は法  
源余の乾正徳院より建仁寺の兼山僧正の中堂たりし  
此寺より於く禅法と佛を家朝禅法の始なり明恵の相尾  
建永あり

源余源家此地と分りし事

一 源氏の玄孫深尾左衛門右衛門時忠は大本節辨信正の父也  
天武天皇の御時より天武天皇の神龜年中少少の近源余

は右佐とて東八ヶ國乃近追神使よりと云々と云く是も  
は平将軍貞盛の孫上総女中左源余より右佐とて  
守府將軍兼伊豫守源の頼義よりと云く是も少少の向也  
此由より年と云くは八幡左衛門と云くは少少の源余と  
云り多しよは源余家お侍の地よりと云くは源余六年  
辛丑より右幕より左衛門將軍源の孫より八幡と云くは少少の  
よりと云くは源余家お侍の地よりと云くは源余六年

頼朝の社并實朝の社

一 頼朝の中より頼朝を本社の西の方よりと云くは源大徳社の社と  
号は社内より頼朝の本像よりなりと云くは源大徳社の社と  
号は社内より頼朝の本像よりなりと云くは源大徳社の社と  
一 實朝の社に頼朝を本社の西の方よりと云くは源大徳社の社と

よみねの道といふ

も氏自画自瀆の地藏

一 荏栢天神よも氏自画自瀆の地藏ありて優よ

夢中有感令我通尊客利濟偏沙畧善根

無為天地藏主

支治四年六月六日

仁山書

後列はゆきもあり

本宮の塚

一 本宮の塚ハ本宮多神の瑞子法皇の冠者兼高の塚なり  
りこハ常ニ申すの末申乃方十町斗りの田乃申すもそ里人  
ゆき本宮めんとしゆ多高の首ハ兼換乃後高又葬ゆき  
りり延宝庚申二月廿四日又田を石井何年とくも本塚をり

一 今この創は葬る塚乃中に青徳の瓶ありてこれ指骨と  
所又はしりて石を洗ひ法皇の塚と建しと今ハ昔ハ  
ちれ後より

一 本宮記ハ運交ハ本宮の丈仏師なりと云は運交ニケイコウリン康運  
康運キョウウン運交ウンカウ色助ハ皆運交の子なりとあり

この塚乃思託

一 此塚合飛ぶといふは伝記あり

景行天皇の御宇ハ思託あり

古麻天皇の御宇ハ龍鬼あり圓丈長は龍とを暴悪と  
るを思人ハ龍とせぬといふはしりて免なり  
武烈天皇の御宇ハ新免又合村大臣は龍とせぬといふは  
此ハ龍塚ハ天降村の隈ハ切人の子を喰ふ長志

あり子十六人をりくに皆流のゆゑ吾れ西の里に長き  
の極なり

飲明天皇壬子年四月十二日同く廿二日よむる近大地表  
動し夫女云と云これ吾れ海と云る一語と云るなり是に  
の語といふ十二の齋齋乃上と云るゆゑは齋齋乃上と云  
は乃上と云ふ女云と云るなり終る吾れと云ふと云ふ

蘭溪江乃作

一同遊江島帰以是宋大休律源禪師

江島追遊別俊髦馬蹄

獵々權春袍零雲分坐

剪香茗策杖徐行蹈巨

鼈洞口千尋石壁聳龍

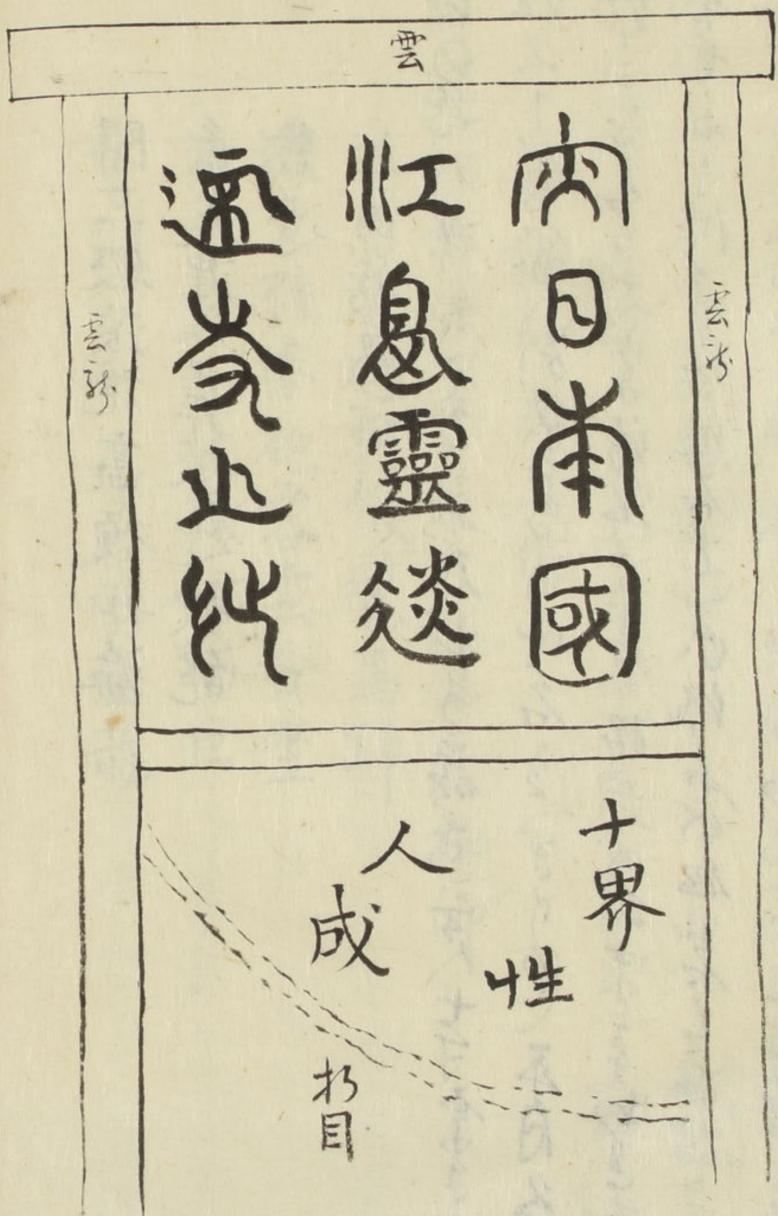
門三級浪花高須知海  
角天涯外萍水迎歡能  
幾遭

江の乃碑

一 江の乃碑石もさみ天斗り序さ三人七寸厚さ四寸  
但上下支縁別の名有り此名もさみ乃の年月久しく  
碑と云る文字彷彿して碑文の中よりあてつき  
合せり後海流石といひ此の碑石也

去御門帝の中宮慈照上人常より其に禪師は是にて  
は碑石を得て取廻すと云ふ家類の小篆と云ふゆゑ大  
篆と云ふあり大甲申必江の乃其法建寺記と云行の  
あり記の字此石換て云くは僅よを偏とて記の字

向の事を知に方雲然をほり分る禪文剽録一々之也  
 廻十界の二字性乃字人の字成乃字字となくよ又也字と  
 楷字なりこも字たの如し



範頼の墓

一金以六庫寺小範頼の墓正上之是下卷妻記小範頼ハ信長  
 の修善寺よりわたりりて握東景村又頼朝中して信長不  
 立誠京村父子二人之百餘族少て押寄の範頼ハ何の坊寺  
 小神小大ワ中りよそあそりりりりり信長信長ハ何の坊寺  
 多のりり何の坊寺多のりり何の坊寺多のりり何の坊寺  
 火とを自殺して失ふ色たりて何の坊寺多のりり何の坊寺  
 の焼着とをく逢念入持りり何の坊寺多のりり何の坊寺  
 何よりり何の坊寺多のりり何の坊寺多のりり何の坊寺

江の島新元

一 江の島乃新元と法中 竟慧ケウケイり小玉記何よまふ小蓬菜洞と  
 何の源秘中りとは色あり



の事よとてんか

一 門家の根をいふ事とてなりきりていひ付たりて其の業に  
ありては其の心より其の業を負たらしむるに依りて其の業を  
もくもたむる村にたるともたむるをいふ者一人の故業不  
て其代のいふ事のかく傳へていふく乃其業をいふ事  
又もいふ事のいふ事とていふ事とていふ事とていふ事  
いふ事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事

業の初本おとらうにははさし事とていふ事

一 業のいふ事お邦よ中其よ増り事とていふ事  
一 此二つは天下のいふ事とていふ事とていふ事  
中其の田を私田にして富民負民と財とていふ事  
質とす貧民財とていふ事とていふ事とていふ事

とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事  
とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事  
の天下乃田を悉く丈量しとていふ事とていふ事  
民の田私と賣買する事とていふ事とていふ事  
一 又曰業のいふ事とていふ事とていふ事とていふ事  
よりいふ事とていふ事とていふ事とていふ事

先生小学の作

一 先生といふ事とていふ事とていふ事とていふ事  
年程後乃事とていふ事とていふ事とていふ事  
其年此の事とていふ事とていふ事とていふ事  
の事とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事  
全は文庫の小学乃事とていふ事とていふ事とていふ事

あつ世よりひたりと貞吉子甲成の夏修り也

趙江孟子の書下并夷堅志

一 古江趙政の書子素句のくさふとる多し一先牛其の位あり

そのの江今乃西系も多しとてサハキヨ草履サハ交りて其後江戸西の

趙氏子とて一と江ありたりとて生修り今もその乃

由よま字を修りとの修り也

一 先生いへ夷堅志の七十巻也其宋板の手写り今も中位也

書月并 東宮皇子

海道記

東園紀行 原祝行

武尾即紀行 小桑 氏康

愚管抄 藤原和尚

吳本午家物語 謙余下 京幸

吳本午家物語 八坂下 京幸 長門下

吳本午平記 今お川中今川お幸志下毛利お幸 今お浪下西源隆下お謙お幸

古本東鑑纂 治時 嘉平

神明鏡

謙余大草紙

謙余九代記

上杉陣秀記

謙余年中記 原成氏記 秀三

謙余又日記

関东兵記

小桑盛衰記

謙余日記

技業禅林法相傳

東海法祖傳

日工集

日作録

諸國清詔集

是年の書もかゝつて益々中位也

一 東文學士侍讀より付ハ心む之よお子士とて侍讀正心乃の方乃極よ尚禮とらふ職あり熟否を記して以後去の修り

とらまをよしあり

古今整統抄書 并 予大信の文乃詩

一 古今整統字鏡の法

塩シ黄ウ一キ

粉コ霜ソウ

硝シヨウ砂サ 各一分

右細研以膠水調任意於鏡上描画入物花草乾火  
片時以磨鏡藥磨去其画自見

予大信之於郷親王

塔影稜々半入雲

王孫曾此洒啼痕

獄中劍氣衝天起

門外兵塵蔽日昏

山鳥乍驚龍鳳質

聖童那識啼王孫

真亡不上禪僧眼

只見灵光竊独存

右々漢金大信乃文の之れ字乃法を伝せしあり

十二単并 兼俱神代抄

一 俗十二字之とくみ色の衣乃事なりと作也

一 兼俱神代抄又叙の字とくみはと後お造しありと云

ハ幡を帝女の対又字の入れよ矢と入をりされ其訓より

用也云々

小ゆききの鎌乃事并 帝王の御并 字はくとし事

一 詔とのおひくけいも山科友と云事友とにきゆきとの事と

ハ地も魚ハ初キヤ

一 帝王の信ハ淡海ニ舟と云とてまじ中記ハ弘仁桓武

の所乃人なり

一 字よ入く字はくとし事源氏入字の如よ入くあり

金人ぬきの事

一 唐人ぬりの傘りとうほーかく津外にるの庵をて織ちる也  
有り利兼子并たつみかやのりにはちまきりもの一糸及よゆき  
のりまふゆき新を命及ふ取るまふ一と此鳥帽子作し信せく  
作し一付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ  
ゆき入るまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ  
まふゆき入りまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ  
まふゆき入りまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ  
まふゆき入りまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ  
まふゆき入りまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ

大塔の文乃後車室

一 大塔の文乃後車室と然此の湯屋屋のり路りしと  
湯屋入るまふゆきりしと右阿部を好ま及のりしてまふ  
時人く借てらつしあり今も久保又冊乃利のりまふと  
まふゆき入りまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ

の借授るに兼ごちを多くしつらまの有りしと信せし

大仰門院の靴子并茶碗

一 かしらげよしたる靴子 後ちつ院寛正の付る吉田家  
ゆき蓋も凡わく兼のりまふとしたるまの有り  
一 兼碗かハの兼ふまふも付るに大寺子會の付吉田入御目より  
しと信せしとふしつらく信くらまたり竹のりかきまありてまふ  
まふゆき入りまふも付を鳥帽子作しゆのりかきまありてまふ一糸及ふ

は月より此の叙并柳糸の蓋 并月費

一 立太子の付はるまふ此の御とらまふとせらるる後位  
乃所よ返一まふは御の男あつたまふ下り力のりかきま  
有りまふよりよまふと友女ありまふまの有り  
一 今この柳糸乃好まふまの有りまふは箱まてま蓋のりかきま

一 赤方の元ぬき形とは月見をいふなり

いそらのゆき

一 いそら丸政を思焼うと淋病より由り付い忽ち疾しる  
又洞をありのふと合してもゆりいそらの目を換せぬ  
よろろけ干みそ人の眼ふけの立ち付き落しを  
ふせしそら少くほひきさき付り少きそけ自ぬけぬ

幽夜の危丁并二のつぎ

一 幽夜の危丁も道一の獅子をぬく刀をばくし  
いふ事と台よしのぬく糸いそらの獅子合ぬ  
ふしむ事れよしとぬく

一 馬乃かきりの事きよふてい今たぬりしうれり今  
唐靴うとけり唐履よむも事あり今も二道旅者よ

箸并同公假并大管

一 一々の事むいハ細く竹をけつてはけてもぬき  
て丸くぬきぬきて物をさうと合し今も神供の箸ハ  
け例よりしこし代例いさる嘴の削なり

一 同公假の事大管今今の神供とさうせりけり  
五子と吉田斗りぬい今人のいりぬ事いけり  
いりぬ事いりぬ事いりぬ事いりぬ事いりぬ事

一 大管の事ハ茶花物徳乃繪うとさうけり画う  
とけりけりけり

牛車并准后の道旨

一 牛車の旨い大車との係りし事よ今あかり入に准后の  
官旨の旨い牛車とゆりけりけりけり



殿上乃むさし追奉り六位の職人より是を伊藤の御入目信  
 是をまら申付の膳とこれの膳と申す存まら申す後乃膳と  
 申すたうまら申す追むと申す御膳大座の御膳も申すまら  
 申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
 申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
 申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

林秘抄并竹田家の事

- 一 林秘抄の中に唐人の黄袍と云ふ但しは黄袍の字二後を  
 黄袍と又漢黄との説有り
- 一 竹田の家は流砥原氏の事と云ふと我々此法を更後了  
 將軍のはして今川と云ふ同僚よりして此の長法は  
 有り其後と云ふに或死の存乳母の子と云ふと云ふ家  
 家へ行く絶流なり

鳥居家系系并附録

鳥居伊噴守元志

休見りて改死を

